

非合理性, 妄想, 産業疲労 : 1920年代初期における エルトン・メイヨーの思想

原田, 実

<https://doi.org/10.15017/4475383>

出版情報 : 経済學研究. 49 (1/2), pp.69-85, 1984-03-10. 九州大学経済学会
バージョン :
権利関係 :



非合理性，妄想，産業疲労

—1920年代初期におけるエルトン・メイヨ어의思想—

原 田 実

はじめに

エルトン・メイヨ어가1923年から1924年にかけてフィラデルフィア郊外のある紡績工場で、高い労働移動の原因をつきとめる調査に従事したことはよく知られている¹⁾。当時アメリカに渡ったばかりのメイヨ어は、精神病理学の知見——理論だけでなくオーストラリアでの臨床経験も含めて——を振りかざして、現代文明社会、とりわけ機械技術優先の産業文明批判に取り組んでいた。

国家間の対立はついに第1次世界大戦を招いたばかりであったし、労資間の階級対立はイギリス、オーストラリアでは激化の道を進んでいる。家族、地域社会というようなかつての共同体も文明の進展にも拘らず、否その故に崩壊の

崩しをみせている。一般にこのような人間協働が失なわれつつあるのは、物質面における技術と経済の進歩にくらべて人間協働に関する科学の進歩が遅れているからである。今こそ人間協働にかんする直接的・臨床的調査を行ない、その知識に基いた1つの科学を発展させ、応用しなければならぬ、というのがメイヨ어의終始一貫した主張であった。フィラデルフィアの1紡績工場の調査研究はメイヨ어自ら直接に参加し、彼の主張を実行に移す最初の機会であったという点で興味を惹く。

小稿では、メイヨ어가オーストラリアからアメリカに渡った事情、紡績工場調査以前にアメリカの人事・労務研究の専門誌に発表した論文、及び紡績工場調査のオリジナルな形をとりあげて検討する。オリジナルという意味は、当時のメイヨ어의解釈ということであって、彼は後になって同調査の意味解釈を拡げているからである。

1. メイヨ어의渡米

エルトン・メイヨ어は1911年、31歳でオーストラリア、クインズランド大学の「論理学・倫理学及び心理学」講座の講師となり、1919年同大学哲学講座担当教授となるが、この間、オーストラリアの大学教育の技術系重視の体質にかねて不満を表明していた¹⁾。社会のエリートと

1) この調査はまず1924年 *Personnel Reseach* 誌に発表され、次いでメイヨ어의第1の主著 *The Human Problems of an Industrial Civilization*, 1933で第2章「単調とは何か?」(村本栄一訳『産業文明における人間問題』日本能率協会昭和26年, 44~53ページ)、さらに第2の著作 *The Social Problems of an Industrial Civilization*, 1945では第3章「第1の探究」(藤田敬三・名和統一訳『アメリカ文明と労働』有斐閣, 昭和26年, 79~90ページ)でくり返し言及されている。後になるほど、当初は指摘されていなかった要因がつけ加えられ、当初の心理学的解釈が薄められている。

わが国におけるメイヨ어研究で唯一といってよい業績を遺された故桜井信行教授もつとにこのメイヨ어의「異なった解釈——というより発展的解釈——」について指摘しておられた。桜井信行『人間関係と経営者——エルトン・メイヨ어를中心として——』経林書房, 昭和36年, 67~83ページ。

1) 拙稿「エルトン・メイヨ어의初期労作について」『経済学研究』第47巻5・6号。昭和58年

なるべき人たち、とりわけ行政官や経営者たちに技術的^{テクニカル}技能とともに社会的^{ソシアル}技能を身につけさせること、その社会的技能の開発に直接役立つような調査研究を推進すること、これがメイヨーの問題意識であった。そのような研究の機会にはアメリカにあるように彼には思われた。

「専門的ないし職業的訓練は勿論必要である。だが技術的なだけの訓練では、社会の不断の進歩の条件であるあの透徹したビジョンを与えることはできない。アメリカでは、大学に対する最もきびしい批判者をも満足させるに足るほど知性的でしかも『実用主義的』なあのアメリカでは、社会調査・研究部門が学問的業績の中でとりわけ際立っている。アメリカは今や社会的実態の理解とそのための訓練が技術的能率と少なくとも同程度に重要であると気づいたのである。」²⁾

こう考えていたメイヨーは幸いにも1922年、ローラ・スペルマン・ロックフェラー基金からの資金援助を受けることができ、同年8月、サンフランシスコに到着する。彼はアメリカで自分の発想(第2節以下で紹介する)が好評を以って受入れられるとは思ってもいかなかったのだが、アメリカ大陸横断の講演旅行は成功を収めた。彼は所属するクインズランド大学にさらに6ヶ月の休暇延長を申請するが、同大学はそれを拒否したのである。オーストラリアに対するメイヨーの不満は募る³⁾。すでに42歳の彼はオーストラリアに帰るか、アメリカに留って新たに地位を求めるかの選択を迫られることになる。

2) Mayo, E., *The Australian Political Consciousness*, in Meredith Atkinson ed., *Australia, Economic and Political Studies*, Melbourne 1920, p. 144
3) Smith, J.H., *The Significance of Elton Mayo*, in Mayo, E., *The Social Problems of an Industrial Civilization*. Routledge and Kegan Paul, 1975. p. xiii

メイヨーの小伝を書いているアーウィックによれば、この時も幸いにカーネギー財団のルムル博士(Dr. Bearsley Ruml)なる人物がメイヨーのために、ペンシルヴァニア大学で3年間過すに足るだけの資金援助を手配してくれたという⁴⁾。ただし資金の出所はロックフェラー財団であったと信ずるに足る傍証⁵⁾がある。ともあれ、1923年の中頃までには、メイヨーは、ペンシルヴァニア大学、金融・商学部・産業研究部(Department of Industrial Research at the Wharton School of Finance and Commerce)の研究員(research associate)として地位⁶⁾を得、オーストラリアから妻と2人の娘を呼び寄せることができた。以来死ぬまで彼はオーストラリアの地を踏まなかった。

さてペンシルヴァニア大学でメイヨーは極めて自由な条件を与えられ、街のレストランで大学院レベルの学生の非公式の集会を主宰することのほかは何の義務も負わないでよかった。彼はフィラデルフィアの多くの企業と接触し、工

4) Urwick, L.F., *The Life and Work of Elton Mayo*, Urwick, Orr & Partners Ltd., 1960, p. 5

5) メイヨーは1925年7月、*Harper's Monthly Magazine*にThe Great Stupidityと題して、機械工場は人間エネルギーの抑圧ないし倒錯の元凶である。この事実に文明が気づかないことが現代の最大の愚行であるという主旨の持論を発表した。それに対して*The Survey*誌の編集者Robert W. Bruèreなる人物が、同誌にThe Great Obsessionと題してメイヨー批判を展開しているがその中でBruèreは、メイヨーがロックフェラー財団の援助を受けていることを指摘し、ロックフェラー財団の研究援助金が厳密な科学的中立と独立を原則として運営されていることを御存知ない労働組合指導者たちはそのことをもって、メイヨーに対するいわれのない偏見を抱くであろうと皮肉っている。Bruèreの論文については、*Bulletine of the Taylor Society*, Vol. 10, No. 5, Oct. 1925に転載されたものによった。同誌, p. 221

6) 上記Bruèreの論文によれば、メイヨーは産業心理学及び臨床心理学の研究員ということになっている。*ibid.*, p. 220

場の諸問題に得意の精神病理学的分析を適用してみた⁷⁾。

1923年から1925年頃まで、メイヨーとしては多産な時期で、創刊されたばかりの *Journal of Personnel Research*⁸⁾, *Bulletin of the Taylor Society*, などの専門誌および *Harpers Monthly Magazine* などに矢継早りに論文やエッセイを執筆している。オーストラリアでは十分発表の機会がなかった彼の主張が堰を切って流れ出し

7) Urwick, *op. cit.*, p. 5

なおペンシルヴァニア大学ワートン・スクールはアメリカにおいて経営学商学の学部としては最も歴史が古く1881年に発足した。(村本芳郎『ケース・メソッド経営教育論』文真堂, 昭和57年3ページ) また人事労務研究に関しては、1921年以来、「地域産業人事研究計画」(“community industrial personnel research program”)を設定してフィラデルフィアの企業30社と協力し、経済学、行政、社会学、歴史学をはじめ、心理学、人類学、生物学、生理学、医学にわたる研究を続けていたという。Willits, Joseph H., *An Industrial Personnel Research Program, The Journal of Personnel Research*, Vol III, No. 4-5, 1925, pp. 125~128

8) この雑誌は1920年に創立された人事研究連盟(Personnel Research Federation)が1922年5月創刊したもので、同連盟の設立当初の記録によれば、次の諸機関が設立に参加している。

National Research Council
Engineering Foundation
American Federation of Labor
Bureau of Industrial Research
Carnegie Institute of Technology
National Committee of Mental Hygiene
University of Pennsylvania

1921年には合衆国政府機関から労働統計局、鉱山局、人事委員会、公衆衛生局が、また大学関係ではハーバード大学職業指導部、および同経営大学院、ノースウェスタン大学、シカゴ大学商学・経営学部が協力会員として参加している。当初の理事長は National Research Council の Robert M. Yerks, 副理事長は ALF のサミュエル・ゴンパースが選出されている。なおメイヨーをペンシルヴァニア大学にあっせんしたといわれるルムル博士は、設立当初、同連盟の事務局長代行 (Acting Director) を勤めている。—Flinn, A.D., *Development of Personnel Research Federation, Journal of Personnel Research*, Vol 1, No. 1, 1922, pp. 7~13

た感がある⁹⁾。当時アメリカの産業界にも、第1次大戦中からの人事管理の発展と普及、また大戦直後の不況と労使紛争、^{レッド スケア}「赤の脅威」キャンペーンなど、労働問題に対する関心を高める情勢があった¹⁰⁾。

他方では、フロイドの精神分析、クーエ博士なる催眠術師の「自己暗示」などが知識人や一般大衆の興味を惹いていた時代である¹¹⁾。「現代の戦争、社会不安、労使紛争等々となって表出する人間の非合理的衝動は、個々人の成長過程に受けた心の傷、ないしは教育の欠陥に由来する妄想や強迫観念によるのである。精神異常者だけではなく、いわゆる『正常人』と雖も多かれ少かれこの種の妄想に、それと知らず支配されているのだ。われわれ自身、不安、焦燥、悲観的空想などを日々経験しているではないか」とメイヨーは警告する。ではどうすればよいのか？ 精神病理学が解決への手がかりを与える。「精神科医が患者の全体的状況を把握しようとするように、産業の管理者が労働者たち

9) メイヨーの論文を列挙すれば;

○The Irrational Factor in Society, *Jr. of Personnel Research*, Vol 1, No. 10, Feb. 1923

○Irrationality and Revery, *Jr. of Personnel Research*, Vol 1, No. 11, Mar. 1923

○Superstition, *The Continental Pathfinder*, Vol III, No. 11, Nov. 1923

○Civilized Unreason, *Harper's Monthly Magazine*, Mar. 1924

○Civilization — The Perilous Adventure, *Harper's*, Oct. 1924

○Revery and Industrial Fatigue, *Jr. of Personnel Research* Vol. 3, No. 8, Dec. 1924

○The Basis of Industrial Psychology, *Bulletin of the Taylor Society*, Vol. 9, No. 6, 1924

○The Great Stupidity, *Harper's*, July 1925

—桜井信行『人間関係と経営者』296~297ページから。

10) 田島司郎『アメリカ労務管理形成史論』ミネルヴァ書房。

11) F.L. アレン著 藤久ミネ訳『オンリー・イエスタディ 1920年代・アメリカ』研究社, 昭和50年109~110ページ, および92ページ。

の不安をあるがままに理解すればよい。だが全体的状況を理解する方法というのがそう簡単なものではない。そのためには広汎に経営労働の具体的状況を調査研究することから始めねばならない。」

おおむねこのような主旨のメイヨーの主張が、彼の精神病理学的専門用語、彼自身の臨床的診断と治療経験も含めた症例引用を随所にはさみながら語られると、恰も権威あるものごとく受け入れられたであろうことは想像に難くない。

冒頭に触れたようにメイヨーは、1923年9月頃からフィラデルフィア近郊の某繊維会社の走錘紡績部門の異常な労働移動率の原因調査を引き受ける。かねて希望していた産業現場における臨床的調査の機会が早くも訪れたのである。250%もの労働移動率に悩まされていたこの工場に、メイヨーらの勧告で定時休憩制度が導入されると、1年後には労働移動が皆無に近くなったという。

まずこの調査に先立つ彼の2つの論文(事実上は1つ)によって当時のメイヨーの立場を検討し、ついで紡績工場の事例とその心理学的解釈を紹介しよう。

2. 社会における非合理的要因

メイヨーは1923年2月と3月、*Personnel Research* 誌に2つの論文を連載している。(彼の肩書は未だクインズランド大学心理学教授であるが、ペンシルヴァニア大学ワートン・スクール産業研究部にいると紹介されている)。第1のものが「社会における非合理的要因」、第2のものが「非合理性と妄想」と題されている(前節注9参照)。

その内容を簡単に要約することは困難だが、

社会不安、とりわけ労使紛争の原因は個人の側にあり、個人が近代機械文明という環境に適応できていないのである。だから社会問題の解決は社会の側からではなく、個人の側から接近すべきこと、さらにその方法は精神病理学の臨床心理学に学ぶべきだというのである。何故なら、異常心理の研究が正常人の心理の理解に大いに役立つことが分ったからである、と。

思うにメイヨーが渡米以来、講演で好評を拍したという内容はほぼこのようなものであったろう。以下その要旨を迎ってみることにする。(なお小見出しは便宜上筆者がつけたものである。)

産業社会の欠陥＝物質文明偏重

18世紀の産業革命以来、産業社会の組織のどこかに欠陥があるという確信が段々強まってきている。「産業は人間の主人ではなく、召使いであるべきだ」、「国家にとっての善は個々の市民にとっての善と矛盾してはならない」というような批判がこんにち随所で聞かれる。そもそも文明はわれわれに二重の努力を課す；個々人の自己表出への努力と物質支配への努力とである。人間が物質支配を広げようとするれば自然力を理解し応用しなければならない。周知のとおり自然科学はそのように発達してきた。

ところが人間は自己自身の内部にもう1つの自然力を見出す。この内なる自然力を理解し制御する努力をわれわれは怠ってきた。これまではそれでも何とかこなってきたが、もはやこのまま放置するわけにはいかないところまできてしまった。いまや人事研究 (*personnel research*) によって文明における人間問題への理解を、少なくとも物質的問題の理解と同程度に引き上げるべきである。19世紀の政治学、経済学の安易な人間把握はもはや役立たないのである。精緻

な産業構造が人間の不幸、恐らくは絶望さえも陰べいしていること示す徴候はすでに十分である。産業が人間に何をもたらしたかを直接の調査によって明らかにすること、これがわれわれのとりうる唯一の救済への道である¹⁾。

社会不安の事例

例えば大規模産業と近代都市の登場以来、地域社会の家庭生活に起った変化を考えてみよう。働きに出る主婦たちはもう昔のように助け合うことがない。娘たちは家に留ってはない。中流の家庭婦人はもはや容易に使用人を備えなくなった。これらの変化の結果としていまでは家事が退屈な雑用とみなされ、そのことはまたホテル、アパート生活、離婚等々様々な形態で表われる。

だがわれわれの最大の関心は文明を支えている工場と営利企業でなくてはならぬ。こんにち社会は過度の疑惑と不信に汚染されており、ストライキと無秩序が横行している。しかもそれらはいわゆる民主主義の方法によって鎮静するどころか屢々過激化させられている。オーストラリアでの事情を紹介しよう。

1890年から95年の間、オーストラリアでまず土地価格の暴騰、次いで破滅的な金融恐慌が起った。さらに同地で空前の2大ストライキが発生し、労働者側の敗北に終った。労働者は政界に自分たちの代表を送る必要性に目覚め、かくしてオーストラリア労働党が誕生した。以来労働党は徐々に勢力を増し、現在、オーストラリアには実質的に二つの政党——労働党とその反対党しかない。その結果は……非常に悪い。労働問題は拡大されて唯一究極の政治争点となってしまった。社会は一方に使用者と専門職の階級、他方に労働者階級が立つ二つの階級に引き裂かれ、両者の間を埋める社会集団はない。「民主的」政党間の相互不信と階

級憎悪は強まるばかりである。すべての選挙は階級戦になってしまった。

1918年3月、クインズランド州の選挙で労働党は、中産階級の貯蓄の没収を狙っていると非難された。労働党が勝つや否や州立貯蓄銀行は「取り付け」に遭い、1週間も騒ぎが続いた。この取り付け騒ぎは州の財政状態からみて全然根拠がなかった。すべて選挙中の政治宣伝で掻き立てられた恐怖によるものであった。

これと同種の理性喪失がすべての労使紛争に作用している。労働党が行政ポストを占めても、労働裁判所の設置もオーストラリアのストライキ件数を減らせなかったではないか。それどころか誤解と疑惑が以前よりずっと広く深くなってしまった²⁾。

群衆心理学批判

いわゆる群衆心理学者はこのような事実を考察して次のような結論をひき出す。曰く、すべての社会情況は「無意識の非合理性」なり「群衆暗示」という要因の侵入によって悪化する、と。彼らはまたそのような非理性的要因は本能的ないし生れつきだと主張する。ル・ボンはいう。「知性の働きにおいて……無意識の現象が圧倒的な役割を演ずる。心の意識的活動は、その無意識の活動に比して小さな意義しかもたない」(『群衆論』30～31ページ) ル・ボンはさらに同一人種の個々人は、この「無意識」の心的要素に関して互いによく似ていると主張している。だから「集合心理」(collective mind)——つまり非専門的集団の討議で出てくる意見は彼らが共通に分かちもつこの「無意識」の心的要素で決まる、と。このようにしてル・ボンは全く根拠のない次のような結論に達するのだ。「共通の利害に係わる決定は、著名な人たちの集団によって下されるだろうが、彼らの決定と雖も、愚か者の集会が採用したであろう決定に

1) Mayo, E., *The Irrational Factor in Society, Jr. of Personnel Research*, Vol. 1, No. 10, Feb. 1923, pp. 419～20

2) *ibid.*, pp. 420～22

くらべて優れているわけではないのだ」(同書32ページ)と。

このような馬鹿々々しい記述があたかも社会心理学への真の貢献であるかのように受入れられているのは許し難いことだ。もし非合理的衝動に関する研究がこれまで皆無というのならル・ボン輩の先験的方法にも多少のいい訳けが立つだろう。しかし、ブレイド、シャルコー、ジャネ³⁾、フロイドらの精神病学者たちは半世

紀以上に亘って思考における幻想、行為における異常として表われる心的メカニズムの研究に従事してきたのである。それによれば非理性的要因は、ギリシヤ人における知識と同じく、広い意味での教育の産物であって、生れつきとか人種に共通とかいうのは全くの誤りである。

かくしてわれわれは群集心理学を放棄しよう。彼らの著作が非理性的要因の心理学的研究の必要性を指摘しているのは認めるが、群集心理学自体はそのような研究に何物をも貢献しない。これに対して精神病理学者の業績はまことに適切であり十分考察に値いする。そのうえ、これらの業績は実証的であり、症例と事実の記述であるという長所もある。理論的精緻さなどという余計なものがついていないところがよい⁴⁾。

心理学の二つの系譜

さてここにち心理学を人間問題に应用するのを妨げているのは過度の専門化である。過去1世紀に亘り、心理学には二つの立場があった。フカデミツク^{アカデミック}とメデイカル^{メデイカル}純理論派と医学派である。心理学者はこのどちらか立場を頑なに守ってきた。両者の研究の対象も方法も全く異にしている。純理論派はわれわれが「何を意識するか」を対象としており、注意集中と思考の過程を研究する。

医学派も、人の意識をあるものに集中させるが、それは無視してその心的背景の中で何が起っているかを探る。ジャネの放心法 (method of distraction) がその典型であるが、ユングの連想法、フロイドの夢解釈もみなこの類であ

3) ブレイド (James Braid) はマンチェスターの医師で、1841年フランスで^{ヒプノティスム}磁気睡眠の実験を見て感銘を受け、イギリスに催眠術を導入普及させた。「催眠」「hypnotism」という用語を作り出したのはブレイドといわれている。(アンリ・エレンベルガー著、木村敏・中井久夫訳『無意識の発見——力動精神医学発達史』上、弘文堂昭和55年、95ページ、99ページ参照)

またシャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825~1893) はフランスの高名な神経学者、治療・研究・教育を総合したサルペトリエール病院を拠点とするサルペトリエール学派の偉大な指導者であった1873年から1893年までの間、彼は当代きっての神経学者とみなされていたという。ジャネもフロイドも一時サルペトリエールを訪れシャルコーのもとで研究している。

ジャネ (Pierre Janet, 1859~1947) もまたフランスの精神医学・臨床心理学者で、コレージュ・ド・フランスの実験心理学教授。心理自動症、強迫神経症の研究で有名になり、のちに壮大な心理学の体系構築を試みた。(以上エレンベルガー、木村・中井訳『無意識の発見』上・下参照)。

メイヨーは精神病理学的方法を語るに際し、大いにジャネに傾倒している。メイヨー自身『ジャネの心理学』という著作があり、同書はジャネに捧げられている。

「1939年7月、パリで、ある会議の休憩時間に、ジャネは私に、自分の観察法が社会的、産業的情况の理解を深めるのに役立つという見方を完全に認めることにしたと語った。長い間ジャネはその見方に懐疑的だったのだ。ジャネ自身パリの刑務所の囚人の調査を実施してみて、われわれの試みの有効性を信ずるに至ったという。われわれはさらに積極的に協力し合うことを約したのであったが、何ということか、1939年9月、戦争が勃発し、われわれの期待は打ち砕かれてしまった。ジャネは幸い戦争を生き抜き、私の『産業文明における社会問題』を読んでくれた。まだ興味を持ち続けていると書かれたジャネの手紙を私は保存している。この小著にジャネのコメントが得られればど

んなによかったことか。」

—Mayo, E., *The Psychology of Pierre Janet*, (Routledge & Kegan Paul) 1952, p. v, 因みに、メイヨーがこの献辞を書いたのは1947年5月だが、その年の2月23日、ジャネは87歳の高齢で没した。

4) Mayo, *The Irrational Factor in Society*, pp. 422~23

る。

一般化すれば、純理論的心理学は理性的過程を研究し、医学的心理学は非理性的過程を研究するといつてよい。だから医学系の心理学がわれわれの話題にふさわしいのである⁵⁾。

医学的心理学の特徴

そこでブレイドからシャルコー、ジャンネ、フロイドに至る研究成果を吟味すると二つの興味ある事実が明らかになる。

第1に、医学的研究なるが故に、ヒステリー、「精神病」は何らかの神経的・器質的障害に起因するという前提から出発したが、結局反対の結論に達した。精神病は心に原因がある。もちろん器質的原因が重要でないというのではないが、心の病気は環境への不適応から生じ、その不適応はさらに器質的欠陥や障害がある場合と同じように精神分裂 (mental disintegration) をひき起すのである。

換言すれば、広い意味での教育こそこれまで考えられてきた以上に重要なのだ。教育によって人は知識だけでなく、精神の健康をも達成する。正気とはたんなる心の自然状態ではなく獲得さるべきものなのである。

第2に、この拡張された意味の教育は、意識的思考集中よりも幻想 (revery) によって出来る。精神病理学は、現実の状況だけでなく、個人が想像の中で作り出した状況もまた人間の発達を規定していることを発見した。換言すれば、個人の発達は、何かの対象や状況の直接体験からだけでなく、直接体験の代替としての空想からもまた生ずるのである⁶⁾。

現代人の不適応と妄想

現代では幸運な少数の人びとを別とすれば、

われわれはすべて自己の環境に対する完全に正常な対応に失敗している。文明はもちろん人間の原始的性向の粗野な表出を禁止する。だがいわゆる昇華された表出さえも否定する完全な禁止は、かえって人を意識されない妄想の展開へと導びく。そのような妄想は、その妄想を抱いている人の主要な人格 (major personality of the individual) からは承認されないが故に、フロイド学派はこれを「無意識」(“unconscious”) と名付けている。この承認されない心的能力の展開こそ、非合理性と葛藤の原因であるように思われる。

症例 1

25歳の女性。16歳の時から狂気に陥りそうな恐れを抱き、不眠と悪感に悩まされる。器質的疾患なし。家系に精神異常なし。高い教育を受けている。

調べてみると誰も彼女に思春期の事実を説明してやっていないので、彼女は体内のいくつかの徴候が理解できず、それらを妄想の中で異常性として「説明」していたのであった。彼女はその妄想が明るみに引き出されると直ちに治癒した。

症例 2

青年医師。同僚からは有能と認められている。隕石に打たれるという恐怖から家に引き籠り、ベッドから1歩も出ない。

隕石恐怖は4歳から始まっており、発病した37歳まで長い妄想の歴史があった。隕石恐怖は症候にすぎない。真の適応不良の原因は、自分の試みることはすべて失敗であったとする妄想にあった。その妄想を理性的討論の素材として引き出すと彼は治癒した。

この種の妄想を発見するのになにも発病した症例を求めなくてもよい。われわれは1人として未知の歓迎されざる心的発達から逃れること

5) *ibid.*, pp. 423~24

6) *ibid.*, p. 424

はできない⁷⁾。

要約

- 1 個人的および社会的状況は、非合理的動機および妄想の侵入によって錯綜する。
- 2 この種の非合理的衝動は生れつきでもなければ、他人に指導されたからでもない。それらは教育と個人の発達の産物である。
- 3 非理性的状態に導く「教育」とは、自認されない妄想によって達成される教育である。そのような妄想が現実の体験の代替をする。
- 4 正常、異常を問わず、人はそのような非理性的状態から完全に逃れることはできない。無知と抑制が強いほど、非理性に支配される領域は広がる⁸⁾。

以上がメイヨーの第1論文の概要である。

3. 「非合理性と妄想」

メイヨーは引き続き先の論文で十分説明していなかった妄想 (revery—これは妄想, 幻想, 白日夢, 夢想, 冥想, 想念などどのようにでも訳せるが, ここでは妄想と訳しておく) について第2の論文で補足し, その産業界での意味について説き及んでいる。われわれも引き続きその跡を辿ってみよう。

「意識の流れ」理論批判

われわれは皆, 妄想とか白日夢とはどんなものか知っているが, 専門的議論としてはもっと精密な定義を要する。かの広く受け入れられている「意識の流れ」理論が馬脚を顕わすのはここである。意識的思考過程を対象とする例の純理論派によれば, 「意識」はまず1つのトピック

クへ, 次に別のトピックへと向けられる注意から構成されているという。

これに対して行動主義心理学にとって根本的な心理的事実は状況と反応である。特定の環境の中で個体は特定の仕方でも反応する。全体としての反応を理解するためには, 個体の意識の流れに上ってこない多くの要因が説明されねばならない。前稿の症例のように, 器質的にはどこも悪くないのに, 高い知性をもつ専門家が「隕石に打たれる」かもしれないという恐怖で寝込んでしまうのは何故か? 彼は「全体的状況」に完全に適切に反応しているのである。では「全体的状況」とは何か? 精神病理学が注意を向けてきたのはその説明——すなわち患者には状況がどうみえているかを明らかにすることである。

かくして精神病理学的行動主義は「意識の流れ」説に対して二つの批判を提起していることになる。

第1に, われわれは目ざめている間中, 1つの対象について「考えている」と同時に, 多くのことを「意識している」のであって, 注意集中と意識とを混同してはならない。

第2に, 「流れ」説はあまりにも記述が単純すぎる。人は目ざめていて何かに注意を集中しているか, 眠っていて何も意識していないかしない。この前提は全く誤っている。24時間正常な個人の意識は全部で4種の位相ないし状態を交互にとっている——注意集中, 妄想状態, 催眠状態, および睡眠である。重要なのは, 分類の基準が意識—無意識の区別ではなく, 注意集中—放心の区別にあることである。睡眠中といえども習慣的判断のなながしかの力があることは誰でも知っている。都会の母親は自動車の騒音には平気で睡るが赤ん坊の立てるかすか

7) *ibid.*, p. 425

8) *ibid.*, p. 426

な物音に目ざめる¹⁾。

意識の4種の位相

してみると意識集中と睡眠との間の区別は、ジャネの用語によれば、意識の「緊張」の程度の差である。いまその視点からさきの4つの位相を考えてみると次のようになる。

1. 注意集中 (concentration) : 心は最高の緊張状態でいわば「働いている」。われわれの観念を能動的に現実という試練にさらしている。
2. 妄想状態 (revery) : 緊張は緩んでいるがなお受動的に注意はしている。注意集中では、思考を方向づけようと努力するのに対し妄想状態では思考はそれ自体で勝手に展開する。
3. 催眠状態 (hypnoid state) : 妄想と催眠は程度の差である。(もちろん注意集中の中でも程度の差はある)。妄想では、ともかく何かについて「考えている」のだが、催眠では「考えること」を放棄している。それにも拘らず、周囲への通常の意識指向は完全に保たれている。
4. 催眠 (sleep) : 周囲への通常の気配りは大いに減少するか弛緩している。ある精神病学者によると眠るという能力は文明人のものだという。何世紀にも亘る安全のおかげで文明人は完全な弛緩を身につけたのである。この説が正しいかどうかは別として、野蕃人が「片眼をあけて眠る」のは確かである。いわば野蕃人の「眠り」は催眠状態により近い。

以上を一般化すると、注意集中とは能動的思

考であり、ふつうの意味での意識性を指す。妄想とは受動思考であり、その内容をあとから正確に想起するのは困難である²⁾。

注意集中と妄想

かくて精神の健康とはこの意味での集中と妄想との関係がどのように成立するかにかかっている。正常な場合、妄想が集中を刺激し誘導するとともに、集中は妄想の材料を提供し、妄想で生まれた示唆を実験的試行や現実の世界でテストするという具合であろう。思考集中の過程は本当は継続的過程ではない。集中から妄想へ、妄想から集中へと素早く往復しているのだ。

ところが、この反応のある領域で、集中と妄想との関係がうまくいかない場合がある。妄想の中で生まれた恐怖や犯罪的観念は意識の前面に登場できず、どこかで勝手に発達し、最後に異常な行動や奇妙な思考となってその当人を驚かせる。

症例 1

オーストラリアの兵士。ヒステリー性麻痺で左手が動かない。器質的障害なし。6年前兵営で流行性脳脊髄膜炎に罹り8週間で完全に回復した。

1週間郷里で静養の後原隊に復帰した。隊は脳膜炎への恐怖でパニック状態にあり、多くの兵士が死んだという。彼は黙って人の話を聞き3つの発見をした。

1. 自分は初期のケースであった。
2. 死ぬか、局所的麻痺が必ずくる。
3. 途中快方に向っても最後は発狂する。

この兵士は誰とも議論せずこう信じた。ある日、仲間が「脳膜炎平地」と呼んでいる場所で塹壕掘りをしている時発作に襲われ、気がつくと左手の指が硬直していた。次の発作はフランスへ移動中、やはり仲間が脳膜炎の後遺症につ

1) Mayo, E., *Irrationality and Revery, Jr. of Personnel Research*, Vol. 1, No. 11, Mar. 1923 pp. 477~78

2) *ibid.*, pp. 478~79

いて喋っているのを聞いて起った。

この兵士は私と20分間話しただけで状況を理解し、左手が使えるようになった。

症例2

シドニーの実業家。突然記憶喪失に陥る。幼時はかなり厳しく育てられたが現在は独身で多くの女性と交渉がある。街を歩いていると性的妄想が心を占領し、それを払いのけようとする。「思考に穴ができ」その穴にはほかの考えは浮ばない。妄想を自由に展開させ、それに真正面から取り組むように助言すると彼は完全に記憶を取り戻し、事業の方でもたちまち元の能力を発揮した。

このように表面に現われた異常な言動や徴候が直ちに真の非合理性を暴露するとは限らないことに注意しなければならない。いわゆる「正常者」、大衆としての人間に心理学的方法を応用する場合、このことはとくに心に留めておかねばならない³⁾。

産業への心理学の応用

例えば賃上げ要求や労働条件改善要求は、不安の徴候であって原因ではない。殆んど人は賃上げや昇給を歓迎するとはいえ、真の病弊が退治されるのでなければ（労働者の）反応と状況は何ら改善されないであろう。彼らの不安と要求はいつまでも続く。労働条件にうまく適応できないことから生ずる妄想は個人を不安、不満、不幸に陥れる。彼は「もう10ドルあったら」幸福になれるだろうと思うがそれは間違っている。

オーストラリアの砂糖産業では賃金と労働条件はいいのに労使紛争が絶えない。紛争の真の原因は熱帯地方の屋外で白人を働かせることの困難さにある。またオーストラリアに限らず世界のどこでも同じことだが、炭坑業でも紛争が

多い。炭坑労働が不快で危険だからだ。たんに賃上げだけでそれ以上の考慮なしに補償されるような人間問題（=不適応）は殆んどない。人が語っている不適応は、真の不適応の手がかりとはならない。

もちろん、産業で働いているふつうの正常人1人ひとりの不安や不満はそれ自体としては大したことがないとしても、社会的、産業的研究がこれまで気づいていないのは、正常人の小さな非合理性が累積するということである。個人が「精神病」になることはなくても、それらが結合すると産業が精神病になるのだ。

さて従来医師たちは、労働者の中の「精神病」、軽い痴呆症や偏執狂を発見するため工場内診療所の活用を提案してきた。異常な人間を産業から排除しようという考えは結構なものだが、もっと重要な研究がある。産業に従事している正常人から異常性を消してしまうことの方がもっとよいではないか⁴⁾。

今後の課題

そのような研究が産業界に拡がってゆけば、労使紛争を制御しようとする他の便法よりずっと有効であろう。そのような方法によってのみわれわれは紛争の真の原因を学ぶであろう。それが分るまで産業における人間状況は改善されないであろう。

われわれはまた現行の教育制度に最も有効かつ興味深い批判を展開するであろう。現在われわれは個人々人を教育しているなどとは到底いえない。われわれは、人をできるだけ早く既成社会の要請という鋳型にはめようとしているだけである。社会不安は教育が人間の面で失敗していることの症候でもある。いずれわれわれは真の社会心理学構築の基礎となるデータを蒐集し

3) *ibid.*, pp. 479~81

4) *ibid.*, pp. 481~483

始めるであろう⁵⁾。

4. 「妄想と産業疲労」—— フィラデルフィアの紡績工場調査——

1923年の後半頃、ペンシルヴァニア大学・産業研究部は、フィラデルフィア近郊の某繊維会社から労務管理上のいくつかの問題の原因解明と助言を依頼された。

それらの問題とは：

1. 精紡職場の労働移動が激しく、生産性が低いこと
2. 撰毛 (sorting) 職場の欠勤と「眼の疲れ」
3. 梳毛 (pickering) 職場の低生産性
4. コーン巻き (cone winding) 職場の欠勤であるが、実際に調査を依頼されたのは第1の精紡職場の労働移動問題であって、他の問題はメイヨーらの調査が進むにつれて明らかになったものである¹⁾。

当時すでにペンシルヴァニア大学の研究員となっていたメイヨーは同大学の医学部病院のスタッフと協力してこの調査に従事した。前節で紹介した産業現場の臨床的調査の機会が訪れたわけである。ではその調査の経緯とメイヨーの解釈を紹介しよう。

5) *ibid.*, p. 483

1) Mayo, E., *The Basis of Industrial Psychology, Bulletin of the Taylor Society*, Vol. 9, No. 6, Dec. 1924, pp. 256~57

因みに第2の職場では労働日10時間のうち10分休憩を6回導入しただけで眼精疲労と消化不良が消失したが生産性の記録はとられていない。第3の職場では調査を実施していないが、経営側が精紡職場と同じ休憩制度を導入し以前は割増しをとれなかったのが5~14%の割増しを稼いでいるという。第4の職場では、労働者(女性)が休憩制度の導入を好まなかった。出来高賃金制であるうえに、材料供給が不安定であったからである。ここでは大学病院から派遣された看護婦がカウンセラーの役割を果し、それだけで欠勤がなくなってしまった。

(1) ある繊維工場の調査

本調査の主旨

高い生産能率は、機械作業の精密な組織、細心の手順計画、職業適性検査、標準作業と奨励給によって達せられると一般に信じられている。組織上のこれらの要素が高い意義を有することは直ちに認められなければならない。しかし他方で労働者の態度 (attitude) に相応の考慮が払われるのでない限り、それらが有効に働かないということも忘れてはならない。生産能率を規定する最も重要な単一の要因は作業中の労働者の心がどういう考えに支配されているか、すなわち妄想 (revery) であることを示す証拠が集まりつつある。

以下に述べる或る繊維工場の労働情況は、私がこれまで主張してきたことの正しさを立証するであろう。その工場の精紡職場は異常に高い労働移動率に久しく悩まされていた。同社の経営者は珍らしく進歩的で人間尊重主義であったし、工場の技術的条件は極めて良好、生産と勤労意欲の観点からみても全体として成功していた。4種類の奨励給制度が実施されていたが十分うまく機能していた。それにも拘らず、精紡職場では、他の職場の労働移動率が年5~6%に留まるのに対し、実に250%、すなわち40人の労働者を維持するため年間100人を傭い入れなければならなかったのである。われわれはその原因の究明を経営者から依頼されたわけである²⁾。

職場の実情

精紡職場の労働時間は1日実働10時間、週5

2) Mayo, E., *Revery and Industrial Fatigue, Journal of Personnel Research*, Vol. 3, No. 8., Dec. 1924, pp. 273~74

日制で他の職場と同じ条件である。勤務は午前中5時間、昼休み45分をはさんで午後5時間であった。作業はミュール精紡機 (spinning mule) の長い列 (30~40ヤード) の間を往復しながら行なう。機械監視工 (head tender) と糸つなぎ工 (piecer) が常時働いているのだが、作業は単調で、作業中の唯一の変化は糸巻きを取り替えるために機械^{マシ}を止めることだけである。また故障による中断もかなりある。

われわれが労働移動の原因調査に入った時、すでにいろいろな「能率技師」の勧告が失敗したあとだったので、経営者はわれわれにたんなる見学者のように振舞ってくれということだった。だからわれわれが入手できた資料は、観察と、作業中の妄想の性質を明るみに引き出すための会話だけであった。しかし直ちに殆んどすべての労働者 (男性) が足の故障で悩んでおり、その適切な治療法を知らないことが分った。多くの者がまた、腕、肩、脚の局所的神経痛を訴えた。さらに彼らの抱く想念的な妄想が一様に悲観的^{ペンシブ}であることも判明した。時として彼らは理由がないのに憤怒に駆られ即刻離職することもあった。自分たちの仕事をさげすみ、「この仕事に頭はいらない、足さへ強ければいい」、「この仕事はすればするほど厭になる」と語っていた。にも拘らず彼らの大部分は職種を変えようとは思っていない。その代り工場を次々と渡り歩くのであった。以上がミュール精紡職場の労働状況であった³⁾。

休憩時間の導入

さて以上の状況を若干検討したのち、経営者は午前と午後10分間の休憩をそれぞれ2、3回入れてみることを了承した。休憩中は横になって休むこととし、われわれは筋肉を緩める最

上の方法を労働者たちに指導した。

休憩時間は次のように決めた：

作業2時間

休憩10分

作業1時間30分

休憩10分

作業1時間10分

計5時間

これによって局所的疲労が少しは減り、また一時的とはいえ、かの悲観的妄想が中断されるであろうと期待したのである。

まず糸つなぎ工全員の1/3に当るチームに実施したところ最初から興味ある結果が出た。労働者自身がこの試行に興味を抱き、われわれが教えた休養法を快く受け入れた——その結果、憂鬱妄想 (melancholy preoccupation) は消失し、生産性は維持され、志気も一般に改善された。このような即効性は生理的疲労の軽減だけから生じる筈はない。マイヤース (C.S. Myers) とヴァーノン (H.M. Vernon) のごとき専門家によれば、生理的疲労軽減の効果は最低2ヶ月を要するという、第2に、勤労意欲の改善が実験チーム以外の労働者にも現われたことから疲労軽減以外の要因が働いていることが明らかである。

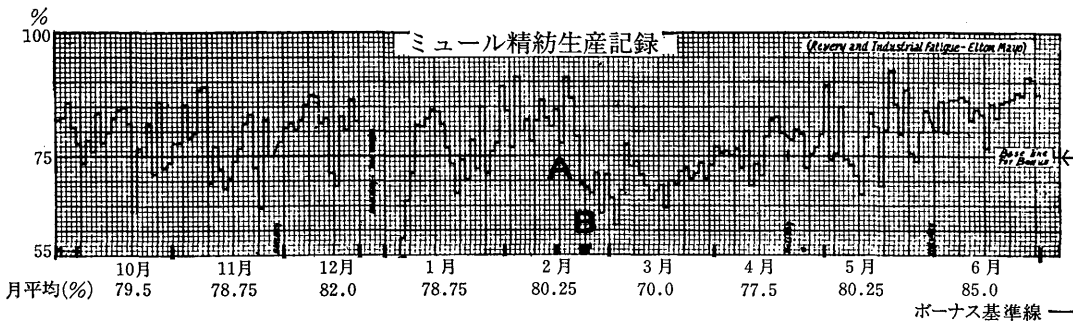
この顕著な効果に喜んだ経営者は1923年10月からミュール精紡職場全員に休憩制度を実施することにした。その結果、休憩制度と生産性の関係の測定が可能になったのである⁴⁾。

生産性と労働移動への効果

第1図は1923年10月1日から1924年6月30日までの日毎の生産能率を100分比で示したものである。糸の種類による所要時間の変動、糸巻き交換や故障等の許容時間を含めて標準時間を

3) *ibid.*, p. 274

4) *ibid.*, pp. 274~75



出所：Mayo, E., *Revery and Industrial Fatigue, Jr. of Personnel Research*, Vol. 3, No. 8, Dec., 1924, p. 276 より

第1図

100% で表示し、月間平均が75%を超えれば超えた分だけ割増しを支払う。75%で基礎賃率を支払うが、75%以下に下っても基礎賃率は保障する制度になっている。

さて、1923年10月から1924年1月まで、労働者の心理的・生理的条件が改善され、能率は80%前後に到達した。しかし休憩制度に不満を抱く現場管理者がいた。彼によると、休憩時間は労働者が「稼ぎ出す」べきである。すなわち労働者は一定量の作業を済ませてから休憩すべきである。だから忙しい日には2回ぐらいしか休憩が取れないこともある。ふつうの日は3、4回休憩が取れるという具合である。このような休憩制度の運用上の変更は、それなりにうまく作用していた。

ところが2月15日(図のA点)から受注増のため、事実上休憩制度は中止されてしまった。2月22日、私は労働者たちの間に、かつての局所的疲労と悲観的妄想が全面的に再発しているのを知った。(図のB点)

そこで私は直ちに休憩制度復活を経営者に要請し、2月25日から経営者もその通り命令したのであった。

その当時私は、図にみられるような急激な能率低下の事実は知らなかったが、たまたま知った妄想の再発という徴候に基いて行動したのである。以後休憩制度は復活したが、その実態はさきに触れた「休憩時間を稼ぎ出す」やり方であり、休憩時間は不規則、不確実であった。ある労働者は全く休憩が取れないのに、他の労働者は1～3回、まれに4回も休憩できるという有様であった。にも拘らずこの職場の生産性は3月の末頃や改善の傾向を示している。これは生理的疲労の軽減の効果であろう。

3月末、経営者はわれわれを呼び、2月の80.25%から3月の70%への生産性低下の原因究明を求めた。われわれは前年の10月以来、減少していた欠勤が再び増加していることを指摘した。労働者は欠勤して休養を取ろうとするのだがそれはあまり疲労回復に役立ってはず、しかも工場作業に混乱を起している。問題は勤務時間のうちどのくらいを休憩に充てるかではない。実のところ休憩時間の割合は減ってもよい。

しかし休憩は制度的に与えられねばならぬというのがわれわれの要請であった。

この段階で同社の社長⁵⁾は英雄的な決断を下したのである。4月以降ミューール精紡職場は1日4回、10分ずつ機械を止めること、職長以下全員(40人)が横になって休息することにしたのである。社長以外の誰1人これによって生産が上ると考えた者はいなかった。労働者たちも40分×40人分の時間損失は取り戻せないと思っていた。機械をこれ以上スピードアップできない以上、損失時間を回復する方法はない筈であった。

しかるに意外にも4月は77.5%に上昇した。休憩を充分にとれるので例の妄想は消失し、勤労意欲も向上し2.5%のボーナスを手に入れた。だが40人が一斉に横になって休息するには場所が足らなかった。5月中旬以降、社長は、交替で休憩する方式に戻した。ただし今度は、精紡機の列ごとに3人のグループを作り、各労働者は少なくとも1日に4回は必ず休憩するという了解のもとにどのように交替で休憩するかを自分達で決めてよいことにしたのである。その結果、驚くべきことだが、5月は80%、6月は従来最高の85%の能率を達成したのである。図に

5) この社長という人物が退役陸軍大佐で、労働者の多くはかつて彼の部下であった。「社長というのは、かつて合衆国正規軍の大佐であって第1次大戦前および戦時中活発な軍務の経験をもっていた。労働者の多くはフランスの塹壕戦で彼の直接指揮下にあった兵士たちで大佐を非常に尊敬していた。彼らは除隊になると社長にしたがってこの工場に就職したのだ。恐らくその故に彼らの悲観的気分も「連隊長」すなわち「会社」に対する怒りとしては表われず、多くの場合自己嫌悪に陥っていた。この気分が1部の現場監督者に対する憤激に転化した。」 Mayo, E., *The Social Problems of an Industrial Civilization*, Routledge, 1975, p. 53. 邦訳, 82~83ページ、(但し訳文は変えてある)

この点がメイヨーがあとから解釈を変えた証拠の1つである。1923~24年の時点ではもっぱら生理的疲労と単調労働による妄想に関心を向けていたメイヨーは、ホーソン実験その他の研究を経て集团的、社会的感情に重点を移したわけである。

は含まれていないが、夏の暑さやその他の障害にも拘らず7月82%、8月83.5%、9月86.5%と高能率が続いている。

実験開始前の能率は正確には分らないが、70~75%を超えることはなかった。労働者たちは割増しを受取る機会は殆んどなかったであろう。それが10ヶ月の実験の結果、能率は80%を超え、同時に勤労意欲は向上し、生理的疲労と欠勤は減少し、仕事に対する労働者たちの心的態度は快活で正常となったのである。

またこの調査の主眼であった労働移動についてみると、実験開始後12ヶ月を経た現在、労働移動は皆無となった。もちろんただの1人もやめなかったというつもりはない。閑散期には若干の者がレイオフされたし、1人は住居が違って別の工場に移ったり、1人は病気で郷里に帰ったりはしている。しかし従来よくあった感情的な離職、かっとなってやめるという移動は絶無である。現在同工場は労働力を安定して維持しており繁忙期にも人手不足に悩まされることはなくなった⁶⁾。(なお図に現われている5月の不規則性は梳綿機と精紡機との関係が崩れたことによる。この欠陥は6月には修復されて85%の高能率を示した。6月中旬の1日だけ生産が低下したのは機械の故障のためである。)

労働者の心を占めているもの

われわれは12ヶ月にわたっていわばこの工場を労働者の心理を研究する実験室として使うことができたわけである。そこでは作業中、労働者の心を占領している妄想の種類について多くの資料が得られた。

- (第1次大戦から) 4年経った現在でも、多くの男たちがあの苦しい戦場体験を追想していた。

6) *ibid.*, pp. 275~79

- さらに多くの男女が家庭の心配事に心を奪われていた。
- 個人的状況を可能な限り詳しく聴取したが、対象となった従業員の3/4がそのような質問とカウンセリングを歓迎していた。いかなる場合も秘密は厳守し、経営側には一切伝えなかったことは勿論である。

以上に関連して、いまわれわれが開発しつつある心理学的技法をここで発表する段階ではないが、その調査技法の4つの一般的方向だけは指摘しておこう。

1. 個人の私的な歴史（彼の主要な妄想を含む）
2. 個人の医学的病歴
3. 現在の家庭状況
4. 職業が個人に及ぼした影響

これらの調査にペンシルヴァニア大学医学部の専門家が援助を与えてくれたことに感謝している⁶⁾。

(2) 心理学的解釈

単調と悲観的妄想

労働問題や経済学の著作で最近、機械作業の単調さに言及するものが多い。ある人は単調労働が人間に及ぼす影響は極めて悪いという。他の人はそれらは無視できるという。このような議論はたしかに問題があることは示すが、問題を明確にまたは詳細に規定するには役立たない。さて労働者の妄想を調べてみると問題の本質は、作業条件によって労働者の心の中に誘発される片寄った観念 (mental preoccupation) がどのようなものであるかにかかわっていることが分る。一般的にいえば、日々の作業ないし職業が、人びとの心の中にすでに存在している悲

観的ないし偏執的妄想を最小化するかまた強化するように作用するのである。労働者であろうと経営者であろうと、人は皆個人的な苦悩や不満を抱いているのであり、仕事が生理的ないし心理的にその人に適合しないならば直ちに悲観的心情が強まるであろう。しかも困ったことに、労働者自身が彼の作業条件を自分に合ったものとみているか否かはこの際何の価値もない。ある労働者がいまの仕事に満足していると自ら信じていても、それも彼の心を占めている幻想かもしれないのだ。

他方、労働者が仕事に不満であるとしても、彼はその根拠や理由を示せといわれるとふつう分らないのである。まして経営者に分る筈がない。

要するに、悪いのは単調労働それ自体ではなく、悲観的妄想ないし他の異常な妄想の成長を促進するような条件下での反復労働なのである⁷⁾。

疲労と非合理性

最後に、悲観的妄想と作業、疲労、非合理性との関係について一言しよう。長い間、有名な精神病理学者が疲労と精神異常ナーバスブレイクダウンとの密接な関係、常習的妄想ヘビチユアルと神経症的理性喪失レヴェリーとの関係に注意を喚起してきた。19世紀後半、シャルコーとジャネはヒステリーが夢遊病ドリームウォーキングの1形態、すなわち外部の現実を無視する幻想に心を占領されている状態であることを明らかにした。ジャネは神経症に関する研究で、疲労に悩まされている人はすべて「顛震、チック、非合理性、強迫観念」のごとき精神衰弱 (psychasthenia) の典型的症状の1部を示すと指摘した (Janet, *Les Névroses*, p. 358)。

フロイドもまた催眠状態ヒプノイドステート (すなわち異常に

7) *ibid.*, p. 279

8) *ibid.*, pp. 279~80

悲観的な妄想)の存在がヒステリーの基礎であり、催眠状態は屢々、「女性の手仕事 (feminine handwork)」のごときものが正常人に惹起する妄想から生ずると述べている。この含意は明らかに作業条件が不適切ならば正常な妄想をヒステリーの妄想に転化させるということである。

しかしこんにちでは異常な妄想の生起を促進するのに「女性の手仕事」よりはるかによい例がある種の職種にみられるようになった。工場や機械職場の仕事が変化に富み、面白い場合もないではない。しかしまた著しく単調で抑圧的な場合がはるかに多いであろう。ふつうの能力をもつ人が極端に反復的な作業に従事し、しかも生理的疲労に襲われてもなおその仕事を続けるならば、ジャネやフロイドの指摘どおり、心的機能の崩壊に導びく状態に陥るに違いない。ここにこそ労使紛争、社会不安の最も強力な原因が潜んでいるといわざるをえないのである。

要 約

1. 通常、ミューール精紡作業は生理的局所疲労をもたらし、その単調さはまた放心状態から悲観的妄想を誘発する傾向をもつ。
2. 休憩時間の導入は、(a)血行の復活と、(b)悲観的妄想を効果的に中断することによって、この傾向を抑え、生産を増大させる。
3. 本稿で述べた例では休憩時間の効果は主として悲観的妄想排除による。
4. 休憩時間の導入に際しては筋肉弛緩法を指導しなければならない。
5. 休憩時間は定時、確実な制度とした方が有効である。
6. 以上の方法によって、感情的な労働移動は消失し、生産能率は増加し、一般的志気も大いに高まった。

7. 多くの工場作業が個人に有害な妄想を誘発するという点で精紡作業に似ている。上記の技法を若干修正すれば他の作業にも有効であろう⁹⁾。

結びにかえて

本稿ではアメリカに渡ったばかりのメイヨーの思想＝文明批評の原点と、それを実証的に裏づけると彼が考えた繊維工場の調査結果報告を紹介した。なるべく忠実に紹介するために、3つの論文を殆んどそのまま訳したわけであるが、メイヨーの文章の難解さ——皮肉とユーモアの混在——と精神病理学的術語の故に彼の主張を正しく伝えているという自信はない。

だが少なくとも次のことはいえるように思う。一般的な社会不安や戦争という大きな問題はさておいて労使紛争の問題に限って考えてみても、問題のすべての原因がもっぱら個々人の幼児体験と教育環境にあるというのは独断にすぎない。彼が批判したル・ボンの群集心理学と同じように思われる。かりに1歩ゆずって、労働移動、職場での労働者の不安や不満、労使紛争等々がメイヨーの診断のごとく強迫観念、思い込みの産物であるとしても、繊維工場の事例のごとく休憩時間の導入でそれらが簡単に解消するというのは短絡的であろう。

また精神病理学的知識と疲労、単調労働の関連でも、十分説得的であるとはいえない。門外漢には批判的に検討する余地すら与えられていない。

それにも拘らず、メイヨーが指摘した諸問題、とりわけ経営労務に関する人間問題は現代においてもなお未解決であるばかりでなく、いっそう重症になっているといえよう。すでに多くの

9) *ibid.*, pp. 280~81

非合理性，妄想，産業疲労

先達が述べているように、メイヨー自身はつねに問題提起者であって、厳密な科学的論証には興味がなかったという批評の通り、われわれはメイヨーの労作に触れてもどかしい思いを禁じ

得ないのである。なおホーソン実験とのかかわり以後のメイヨー思想の展開については稿を改めて論じたい。